

【一般演題1】 第2席

『甲乙経』の穴位主治病證と経脈病證

東京 篠原 孝市

『甲乙経』の穴の主治条文の問題を扱う場合、考えておかななくてはならないのは、穴の主治病證と経脈病證との関係である。それはなによりも『甲乙経』巻之三にみられる穴の構成が、手足＝経脈、躯幹＝部位別に編集されていることから想起される課題である。もちろん『甲乙経』巻之三では躯幹の穴にも経脈との関係は記載されている。にもかかわらず、躯幹の穴の経脈配当が確定するのは、ようやく宋代以降のことである。したがってこの構成自体の持っている意味はこれまで考えられてきた以上に大きいと思われる。経脈と手足の穴の関係については、馬王堆医書、『靈枢』本輸篇、『甲乙経』巻之三、そして『千金方』『千金翼方』などが示唆的である。手足の穴が部位別に編集されるのは、後代の少数の文献に見られるにすぎない。すなわち、歴史的に手足の穴は経脈と密接な関係にあり、これを切り放して考えることはできない。しかし、そうであるならば、経脈の病證と穴の主治条文の間にもなにがしかの関連が見いだせる可能性がある。これまで、穴の主治病證は単に「観察と経験の蓄積」（藤木俊郎）と見なされてきた。しかし、それを経脈病證と比較対照することにより、穴の主治病證の成立ちの問題や、手足の穴と躯幹部の穴の差異、ひいては経脈と手足及び躯幹の穴との関係についても多様な観点が見いだせる可能性がある。

経脈病證は、『素問』『靈枢』の諸処に散見するが、特に重要なものは馬王堆医書との関連の深い『靈枢』経脈篇のそれである。今回の発表では、経脈篇と『甲乙経』の主治条文の比較対照を通じて、その両者の関係、及びそこから導き出される経脈と穴の关系到論及する。